

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。



明治維新は、西洋列強国の植民地政策から日本の独立を守るために、各藩ごとに自治権のある連邦封建制から、国への一極集中をはかり、強力な中央集権国家にする必要からおこりました。

そのためには、藩を廃止し、全国民の能力を最大限に生かすために武士という身分・既得権を廃止し、国民を平等にする必要がありました。

結果、維新を成し遂げた武士が、その後に自らを消滅させるという、世界史的に例のない珍しいことがおこりましたが、以下のような流れでした。

明治元年、藩主と家来の従属関係を廃し、過去の身分を廃し、能力のあるものを登用し各藩の改革を進みやくする”藩治職制令”を布告しました。

明治2年、藩の領地、領民を天皇にお返しするという名目で”版籍奉還”をおこない、領地領民を大名から取り上げ、大名は単なる管理者としました。

明治4年、中央集権化の仕上げとして、266の藩を統廃合して”廃藩置県”が断行されましたが、驚くべきことに発令のたった8日前に西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允のたった3人の決断だけでおこなわれました。ほとんど根回しがなく、大きな混乱が予想されましたが、1件の武装蜂起もなく平和裏におこなわれました。

これは、西郷隆盛が蜂起するものは政府軍で鎮圧することを公にしていたことや、藩主を慕い蜂起しようとする土族を、藩主が”時代が変わったのだからこれからは天皇に忠節すべし”のように説得をしていた藩も多くありました。

これによって鎌倉時代から長く続いた封建制度が消滅しました。

明治6年、政府軍を武士に依存しないようにするため”徴兵制”を開始。

明治9年、武士の魂である刀の帯刀を禁ずる”廃刀令”と、版籍奉還から政府から減額されて支給されていた家禄（給与）を廃止する”秩禄ちつろく処分”がおこなわれ、武士の特権は制度上すべて失われました。

明治政府は国の改革を急がなければなりませんでしたが、一部の人間による専横的にみえる急進的な改革に対する不平土族も多く存在しました。

明治9年秋に熊本、福岡、山口土族200~300名規模が相次いで蜂起しましたが、すみやかに鎮圧されました。

西郷隆盛は明治6年の政変から下野し鹿児島にいましたが、明治10年、明治政府の西郷暗殺計画という誤った情報と、政府が鹿児島の弾薬製造工場の弾薬を秘密裏に搬出しようとして、これを鹿児島土族が奪ったことがきっかけとなり、西南戦争がはじまります。西郷はそれを知ったときに”しまった”と叫び、土族の蜂起が止められないと悟り、「わしの身体は、オマエたちに差し上げもんぞ」といい拳兵に同意しました。戦の指揮は主に桐野利秋ら幹部でおこなわれ、西郷は神輿として厳重に警護されていました。7ヶ月に及ぶ戦闘は両軍1万3000人の死者をだし、土族に父の如く慕われた西郷隆盛の死によって終わりました。以後土族の反乱はおこらず、源頼朝からはじまった武士は西郷隆盛の死で終わりました。

しかし、指導的な立場だった武士の血は、多くの国民に広がることになり、現在の日本人の多くが持つ、自らを律する国民性として生き続けることになります。